

三島村・鬼界カルデラ 日本ジオパーク新規認定審査 現地審査報告書（公開版）

【日程】2015年（平成27年）8月10日～12日

【現地審査員】

宮原 育子（日本ジオパーク委員会）

大野 希一（日本ジオパーク委員会）

坂之上浩幸（霧島ジオパーク）

【現地対応者（所属）】

大山辰夫（三島村村長 三島村ジオパーク推進連絡協議会会長）、岩切平治（三島村副村長 協議会会員）、江口英雄（三島村教育委員会教育長 協議会会員）、大山秀人（三島村総務課長）、宮田雄次（三島村定住促進課長）、佐藤浩（三島村議会議長 協議会会員）、長浜義人（三島村議会議員）、大岩根尚（三島村定住促進課 ジオパーク専門職員；海洋地質学）、小林哲夫（協議会顧問 鹿児島大学名誉教授協議会学術顧問）、東川隆太郎（協議会顧問 NPO法人「かごしま探検の会」代表 協議会学術顧問）、鶴丸寛人（鹿児島県鹿児島地域振興局総務企画課主査）、杉元春菜（鹿児島県鹿児島地域振興局総務企画課主事）、大町祐二（三島村ジオパークガイド）、安永親志（三島村ジオパークガイド）、徳田和良（三島村ジオパークガイド）、山崎 晋作（三島村ジオパークガイド NPO法人「みしまですよ」代表 協議会関係外部組織）、日高正行（NPO法人「みしまですよ」 竹島ジオ弁当製作）、安永孝（硫黄島区長、協議会会員）、今別府秀美（遊漁船船長）、田中宏和（ジャンベ奏者）、硫黄島住民23名（青年会長、婦人会長、出張所長、観光案内所、小中学校長、特産品開発、ジャンベスクール生徒など）、田島教子（株式会社タジマ 旅行業事業部）、菊池瞳（南薩観光株式会社 GSEコンサル&マーケティング社常務取締役地域企画担当）、村方直己（同社 企画造成リーダー）、高野寛子（南日本新聞社編集局報道部）

【見学地点・行程】

1. 8/10：三島ワンデークルーズ 村営フェリーみしま丸で三島巡り。一般募集しているツアーに参加、枕崎港出発、黒島（片泊港、大里港）、硫黄島、鬼界カルデラを航海、竹島（各島港では上陸）鹿児島港帰着
2. 8/11：鹿児島港発（フェリーみしま）、竹島港、硫黄島上陸、カルデラ壁ジオサイト、岬橋、恋人岬ジオサイト、大浦港ジオサイト、俊寛堂、平家城、三島総合開発センター、東温泉、住民ヒアリング
3. 8/12：熊野神社、黒木の御所、硫黄島出発、竹島港、鹿児島港、三島村役場（講評）

【現地審査のまとめ】

1) 三島村・喜界カルデラジオパーク構想地域の概要

三島村・鬼界カルデラジオパーク構想地域は、鹿児島県本土、薩摩半島の南端から約 50 km の海上に位置する離島三島とその周辺海域である。人類が将来経験しうるであろうカルデラ噴火がどのようなプロセスで生じたのかを記録した貴重な地層群や、多様な温泉、活火山である硫黄岳と硫黄採掘にまつわる歴史、国の特別天然記念物に指定された黒島の特異な植物群落、竹島を覆いつくすリュウキュウチクなど、3つの島それぞれ独自の見所がある。地形地質に限らず、海洋や歴史など、様々な分野の研究者が多様な研究を持続しており、島の学術的価値は十分に担保されている。また専門員の献身的な取り組みにより、最先端の学術研究の成果が村民や観光客に提供され、その結果若い世代がジオパークを活用した地域振興に積極的に関わろうとする機運が生まれつつあり、全村民によるボトムアップ型のジオパーク活動が実現しうるポテンシャルを有している。

その一方で、ジオパークを推進する協議会の明確な行動計画策定が遅れていることや、3つの島におけるジオパーク活動の取り組みに対する温度差、また解説板の設置計画やパンフレット類およびガイド養成といったソフト面の整備にも遅れが見られることが課題である。

2) ジオサイトと保全

硫黄島および竹島には、7300 年前に起きた鬼界カルデラの噴火に由来する火砕堆積物が分布し、それらの地層群から、破局噴火にいたるプロセスが読み解ける多数のジオサイトがある。一方、黒島には鬼界カルデラの噴火に伴う噴出物がほとんど見られないなど、3つの島で多様なジオサイトが見学できる。

自然環境の保全については、「三島村自然保護条例」、「三島村昆虫保護条例」が制定されているほか、硫黄島の硫黄採掘跡についても、文化財として指定を受けるための準備が進んでいる。しかしながら、島内のジオサイトは、国立公園、国定公園、県立自然公園のいずれにも属さず、また国有林も存在しないため、法的な保全はなされていない。

3) 教育・研究活動

三島村では、九州大学、鹿児島大学、東京大学、北海道大学、岩手大学などの研究者が、熱水環境や鬼界カルデラの噴火、硫黄岳の火山活動、海底地形の調査、硫黄採取とその流通史、縄文時代の遺跡の研究など、あらゆる分野での学術研究を進めている。硫黄島では地熱を利用した地熱発電と、その電気を活用した水素製造プラントの建設も計画されている。

一方で、地元の小中学生を対象とした、ジオパークを活用した教育活動は、三島の魅力を発見する体験プログラムが過去に行われた程度で、現在は行われていない。硫黄島にある鹿児島市の少年自然の家の活用と併せて、ジオパーク教育の実施体制を整備する必要がある。

4) 管理組織・運営体制

三島村・鬼界カルデラジオパーク推進連絡協議会は、三島村村長を会長とし、会員に副村長、議会議長、教育長、硫黄島地区長、小中学校長、学術顧問に鹿児島大学、九州大学、東京大学の研究者及びNPO法人の代表からなる13名で構成される。黒島、竹島の地区長の参加はこれからとなる。同協議会事務局及びジオパーク担当課は、ジオパーク専門職員1名を含む5名体制で、十分な人員が整っている。

現時点では内部組織としての部会や委員会などの専門的分野を担当するグループが存在せず、協議会内における役割分担が明確になっていない。しかし、平成27年度が三島村の総合計画の見直しと、地方創生の戦略計画の策定の時期にあたることから、これらの計画の策定に合わせて現在の協議会組織を再編し、持続可能な運営組織の確立と事業の実施体制の整備が行われる予定である。

5) 地域の持続可能な発展とジオツーリズムについて

島への交通手段は村営の「フェリーみしま」と、新日本航空株式会社が週二便運行するセスナ機があるのみで、島への来訪者の流れと数は自ずと限定される。島内の道路は狭隘なところが多く、島内の観光は役場または、個人の車を利用している。このような環境の中、既に三島村が鹿児島市内の旅行会社と共同で複数回実施している「ワンデージオクルーズ」は、三つの島を眺めるだけでなく、専門員が霧島、桜島、開聞岳に連なる南九州の火山列と鬼界カルデラ、火山列の成り立ちなどを、レクチャーと景観解説を組み合わせる平易に解説するジオツーリズムプログラムで、参加者から高い評価を得ている。フェリーの中には、鬼界カルデラや火山、三島の自然を解説するパネルが常設展示してあるほか、硫黄島にある三島開発総合センター内にも鬼界カルデラの立体模型や海底地形のCGシステムのディスプレイなどがあり、観光客がジオパークに関する情報を入手できる仕組みが整備されている。今後、各島での停泊時間を30分から40分程度まで延長し、ジオガイドが港周辺のジオ的資源の説明を行い、特産品を販売する機会を広げれば、ジオパークを活用した三島村の経済的効果はさらに拡大するものと期待できる。

島の限られた観光インフラを無理に整備せず、現在のキャパシティでしっかりしたジオのプログラムを構築し、観光客に提供することは、島の環境保全に繋がる。また、そうした限定的なプログラムは、観光客にプレミアム感を持たせることにもなると考えられる。

このような、島のすばらしいジオ的資源をさらに効果的に活用するため、ジオパークとしての総合案内板、重要なジオサイトへの解説板設置を計画的に進めるとともに、島の学術的価値を正しくわかりやすく説明したパンフレット類の作成やジオガイドの育成を行い、ツーリズムとしての受け入れ態勢の整備を進める必要がある。

6) 国際対応

既存の観光看板を見ると、外国語表記はなく、また観光パンフレット類も日本語版だけで

ある。少なくとも看板類については外国語の併記が望ましい。硫黄島では20年来、ジャンベを通じたギニアとの音楽交流があり、島内でジャンベスクールが運営されるまでになっている。この点を切り口とした国際対応も考えられる。

7) 防災・防災教育

1934年の昭和硫黄島の噴火以降、硫黄岳で小規模爆発が繰り返し発生していることもあり、活火山の近傍に暮らすことへのリスクを住民は十分に意識している。毎年9月には大規模な防災訓練も行われ、ハザードマップを元に硫黄岳が噴火した場合の一時避難場所の確認や、全島避難の方法および避難指示を出すタイミングについて、情報の共有が行われている。その一方で、地域住民を対象とした系統的な防災教育が行われていないことや、宿泊施設にハザードマップの掲示がなく、防災に関する情報提供が十分になされているとはいえない。今後、民宿や港などに、ハザードマップや避難マップを掲示する必要があるだろう。

8) 結論

三島村・鬼界カルデラジオパーク構想地域は、7300年前に発生した破局噴火がつくり出した景観と、そこにすむ住民がつむいできた歴史や文化を主な見所とする地域であり、ジオパークとしての資源を十分に有している。様々な分野の研究者による地域研究が持続し、海洋地域や歴史に関する学術的価値も十分に保障されている。

少ない人口や、厳しい財政事情にあるにもかかわらず、専門員を中心に、地域住民も活動に参加し、ジオパークを活用したボトムアップ型の地域振興の素地が作られつつある。さらに、その地域の盛り上がりをうまく活用した旅行商品が販売され、利用者から好評を得るなど、すでにジオツーリズムを楽しむ仕組みも出来上がっている。

ジオパークとしての看板類やパンフレットといったハード・ソフト面の整備、ジオガイドの育成、地域遺産の実質的な保全対策など、まだ不足している部分はあるものの、地域全体がジオパークを活用したボトムアップ型の地域振興が実現可能な、高いポテンシャルを有していると判断できることから、現地審査員は三島村・鬼界カルデラジオパーク構想地域が日本ジオパークにふさわしいと結論づけた。